

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4590600179		
法人名	医療法人杏林会三股病院		
事業所名	グループホームみみつ2号館(ユニット名:富士)		
所在地	宮崎県日向市美々津町2975番地		
自己評価作成日	令和5年6月26日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/45/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	一般社団法人 宮崎県介護福祉士会		
所在地	宮崎県宮崎市原町2-22 宮崎県福祉人材センター人材研修館内		
訪問調査日	令和5年12月19日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<p>①入居者様中心の支援を常に心がけています。 ②入居者様の意志を尊重した楽しい暮らしを支援します。 ③「我が家」として生活して頂けるような設計にし、リビングの一角にふれあいコーナーを設置。開設後すぐに、コロナ禍の影響により、交流の機会をつくることができませんでしたが、今後は訪ねてきて下さる方々との交流の場づくりを目指していきます。 ④農園で四季折々の野菜を入居者様と一緒に育て収穫して調理します。 ⑤馴染みのある暮らしの継続を支援し、入居者様やご家族様の希望に応じて、看取り介護にも力を入れています。 ⑥職員は、全員が医療や福祉の有資格者であり、研修等を通じて更なるスキルアップを目指しています。</p>
--

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>海と山に囲まれた敷地に立地し、すぐそばには地域公民館がある。地区内の行事があれば住民との交流が行える。近くに母体の病院があり、医療面での安心感もうかがえる。ホームは、開設4年目であるが、職員は忙しさを感ぜさせない動きで終日落ち着いた雰囲気であり、入居者は安心して生活できている様子が伺える。職員は向上心を持ち、資格取得や研修等に参加してスキルを上げている。管理者は職員の話をよく聞き、入居者中心の支援ができるように心がけている。</p>

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業所の理念を全職員が理解・共有し、朝礼時に唱和を行い日々の業務に臨んでいる。また、唱和を毎日行うことで職員の意識づけとなり、自然に行動に移すことができ、ケアに迷った際の道標となっている。	理念と職員の目標は、それぞれのユニットの入り口に掲示されている。職員の目標は、毎年皆で見直し、状況にあった目標となっている。職員は、意識しながら入居者のケアに活かしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	5類へ移行後も、面会は限られた方のみで制限がある為、地域の方々との日常的な交流の機会を得ることは未だに行えていない。	入居者に地元の方が多数おり、顔なじみが多く通りすがりに声を掛けて下さったりしていた。通所型デイサービスを利用している方から地区の情報を皆さんに伝えることができる。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	5類へ移行後、6月に集合型で初めて運営推進会議を開催した。当施設は海に近いことから、防災について多数の意見を頂いた。今後、合同訓練等を実施しながら、より安全な施設となるよう取り組んでいきたい。	/	
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	6月に集合型で初めて運営推進会議を開催し、火災訓練についての報告を中心に行った。頂いた意見は職員会議のなかで振り返り、できることから日常的なサービスへ反映させている。	コロナ後、令和5年6月より集合で運営推進会議を開催する事ができた。地区長、消防署、民生委員、行政以外に全家族に出席をお願いし、毎回8～9名の参加がある。詳細な資料に質問も多く、意見をサービスに反映しやすい。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市町村担当者と日頃から連絡を取り、事故報告やその後の支援の在り方などについて相談や助言を頂きサービスの向上に努めている。	行政の担当者が運営推進会議のメンバーでもあり、相談しやすい関係である。提出書類等の相談や助言を頂いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束をしている方はいない。又、身体拘束に関する勉強会を行い、身体拘束がなぜいけないのかについての理解を深め、職員一人ひとりがご家族様から尋ねられた時に、言葉で分かりやすく説明し、応対できるように取り組んでいる。	毎月2回のオンラインを使った職員勉強会等を行っている。勤務等で参加できなかった職員には、別途伝達が行われている。身体拘束適正化委員会の中で研修を行っている。気になった事は状況をみながら管理者が職員と話している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待についての勉強会を行い、全職員が理解しケアやサービスの向上に努められるようにしている。	/	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	制度利用について、勉強会で学ぶ機会は得られ、理解も深まっている。該当する入居者様や成年後見人と話し合い、権利擁護について取り組んでいる。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には、不安や不明な点がないように分かりやすく丁寧に説明し、報酬改定や負担金の値上げ時には資料等の書面を用いて説明を行い、承諾をいただいている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	入居者様やご家族様等が気軽に相談できるよう面会時だけではなく、電話での相談対応も行っている。また、運営推進会議を開催し、意見を伺い運営に反映している。	常に電話やSNSで意見を頂いている。家族が運営推進会議の委員であり、避難訓練や外出、面会等の質問が多く、都度応えている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	年2回、職員一人ひとりと面談の機会を設け、職員の意見を反映させながら各自が向上心を持ち働けるような環境にある。出た意見は、職員会議や業務検討委員会等で、管理者が代表者へ伝えている。	職員の育休明けや家族の介護のための勤務時間等についての相談に応じている。停電時の対応についての職員の意見で大きめの発電機の購入ができるようになった。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	資格取得をした職員は給与水準が上がる。年2回法人内での自己評価があり自己の振り返りや管理者と一人ひとり面談の機会がある。職員の意見を反映させながら各自が向上心を持って働けるような環境にある。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人外での年間研修計画表を作成し、研修の機会を設けている。また、事業所内での勉強会も毎月開催している。職員の力量を把握し、認知症実践者研修を受ける機会を確保している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域内にある他施設とのネットワークづくりは行われており、相談連絡が行える体制づくりができています。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	ご本人の言葉に耳を傾け、手を擦ったり、お茶を飲みながら対話や一緒に過ごす時間を大事にしている。また、話の内容は、日々の記録に記入し、ご本人の思いをいつでも職員間で共有できるようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ご家族様から話を伺うだけではなく、ご本人の話しにも耳を傾け、その方らしく生活していく為にはどのような支援が必要かを職員全員で考えながら関係づくりに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	専門医やケアマネジャーとの連携を図り、必要としている支援を見極め、母体である病院や多職種と連携を図りながら対応ができています。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	日常生活の中で、調理や洗濯などの家事を共に行い、生活を共にして歩んでいるという関係づくりを自然な形で築くことができています。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	入居後も、職員が過度に介入しないよう、ご本人との関係が良好に保たれるよう、ご家族様と情報を共有し、連絡も密に行っている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	5類へ移行後も、面会は限られた方のみで、外出は行っていない。葉書や電話、面会、近くの商店から花見弁当の配達をしてもらったりなど、関係性が途切れることのないようできる支援に取り組んでいる。	コロナ5類移行後も、外出の機会は少ない。花見時地域の商店より花見弁当を調達した。11月の祭りでは、地区の方々の踊りを通して交流が行えた。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	馴染みの方や気の合う方との交流がしやすいように席を配慮している。体調が悪く居室から出て来られない方にも、居室に出向き入居者様同士で、声をかけ合う場面も多々ある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院された際は、情報提供を行っている。入院先でもどのように過ごしたらご本人が戸惑いが少なく安心して入院治療を進められるかなどについての、習慣やケアの工夫についても入院先機関に伝えるようにしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	担当職員が暮らしの中でご本人の希望を聞いたり、表情や日常生活上での行動からも、意向の把握に繋がるような、ひもとき支援のヒントをみつけられるよう取り組んでいる。	家族からの情報での思いの把握に加えて、出来るだけ本人の言葉で把握するように努めている。しぐさや表情を見逃さないようしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	アセスメントを全職員で行い、情報の共有ができるように努めている。職員全員でご本人のこれまでの生活を知り、その方らしく生活できるように支援している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人ひとりの生活リズムを把握した上で、一つでもご本人の役割や楽しみ、生きがいを見い出せるよう、自立支援に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	職員全員が、計画作成担当者と共に、モニタリングを実施し、計画や支援につなげることができるよう努めている。	毎月計画作成担当者と職員で話し合い、モニタリングを行っている。担当者会議の前に家族に意見を頂くようにしている。介護計画は職員が確認できるようにラミネートしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護記録に生活の中での気づきを記入したり、水分摂取量の少ない方は、水分チェック表を活用し、職員間での情報の共有がスムーズに図られるようにしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	男性の介護職員が各ユニットに1名ずつ配属されている。男性職員が勤務していることで、ご家族様や入居者様から安心感の言葉をいただいている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	5類へ移行後も、様々な制限がある中で、園芸や草刈りなど屋外作業の協力を受け、地域のボランティアとの協同のもと、豊かな暮らしの継続が行われている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居前より、母体の病院を主治医としていた方もおり、病院との関係性も築けている。認知症専門医や、眼科、耳鼻科等へご本人やご家族様の希望があり、受診している方も数名いる。	母体病院がかかりつけ医であり、月1回の訪問診療を受けている。内容は職員全員が記録する個人記録に記載し情報の共有が図れるようにしている。眼科、耳鼻科、皮膚科への受診は職員が付き添っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	状態の変化に気付いた場合は、すぐに事業所内の看護職員に報告、相談の対応をしている。医師や看護職員との連携が図れており、24時間体制で入居者様の健康管理が行えている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には、入退院時の連携シートを活用し、病院との情報交換を行っている。また、治療期間等の確認や入院先に出向きご本人の状態について把握するなど、スムーズな退院ができるよう関係づくりに努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	ご本人やご家族様には重度化した場合にご本人のような生活を希望し、どのように生活したいかの確認をしている。また、事業所内で終末期の在り方についての勉強会を行い、その中でどのような支援ができるのか考える場を設けている。	看取り指針があり、開設当初より看取りの経験がある。重度化した場合は、毎日状況を家族に伝えている。週1回は対面で母体病院を交えて話し合いを行っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時の対応や、心肺蘇生法についての訓練を行っており、AEDの設置もある。確実な行動がとれるよう、電話の横に連絡先の手順を書いた用紙を貼っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	アクションカードを作成し、避難訓練を実施している。具体的に避難知識を習得し、行動に移すことができている。また、台風時の停電への対応や災害時の避難用具も備蓄しており、定期的に備蓄の確認も行っている。	年2回の法定訓練とは別に3回の訓練を行っている。地震・津波時には地域住民の広い庭に避難するようになっており、毎年訓練を行っている。地域の避難訓練にも入居者2名程と一緒に参加している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	職員会議や勉強会の中で、認知症の方ではなく、一人の人として尊厳の気持ちを持って接することの大切さを振り返る機会を設けている。排泄の声かけ等、さりげない言葉かけにも工夫している。	職員会議時に勉強会を行っている。入居者の生活のリズムを大切にし、ゆったりとした対応をするように心掛けている。排泄介助時にはさりげない声掛けを行っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	意思表示が十分に行えない場合であっても、選択をして頂いたり、表情に表れるご本人の思いから汲み取るようにしている。また、誕生日の日にはご本人が食べたいものをメニューの中に取り入れている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	話を傾聴し、ご本人が自己決定できるような声かけを実践している。職員が日課を決めるのではなく、ご本人に選んで決めてもらえるようにしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	普段着を選んで頂いたり、美容室の方からヘアカットして頂く際も、職員が髪型を決めるのではなく、ご本人に決めて頂いている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	入居者様に食べたいものを聞きながら、職員が献立を作成している。誕生日や行事がある月は、希望を尋ねたり、季節のものを取り入れている。食材切りや片付け等を一緒に行っている。	病院の管理栄養士の指導を受けながら、ホームで献立・調理を行っている。できる方には、テーブル拭き、盛り付け、食器洗い等のお手伝いをさせていただく。誕生日には、本人の希望を聞き提供している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	栄養面については、管理栄養士より栄養指導を受けて食事内容の工夫を行っている。スプーンが必要な方、丼物が苦手でご飯とおかずを分けて食べたい方などご本人の意向を確認しながら支援している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	協力医療機関である、歯科の歯科衛生士に月1回来てもらい、評価や指導を受けて個々の口腔ケアの方法に応じたケアを行うことができている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄パターンを確認しながら、職員間で情報共有を行い、要介護状態に関係なく、トイレで排泄してもらい取り組みや可能な限り布パンツを使用して頂けるように取り組んでいる。	記録をもとに排泄パターンを把握し、トイレに誘導している。病院から退院後、おむつからリハビリパンツに移行した方もいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	自然に排便ができるよう、水分補給や適度な運動を行ったり、腹部マッサージを勧めたりしている。又、オリゴ糖を加えるなど、工夫を行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	湯の温度も、一人ひとり好みによって調整をしている。「毎日入らんでいい」のお言葉から、入浴者は予め決めてあるが、その時の気分に応じて、続けて入浴している方もいる。	座って入れる特浴槽があり、18名中12名が利用されている。個人の好みのシャンプーやボディソープが準備されている。基本週3回の入浴を実施している。ゆず湯やしょうぶ湯も行い、楽しまれている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	入浴後には、居室で過ごすことを好まれる方や、リビングソファに座りうたた寝をする方もいる。気の合う方との座席の配置にも配慮している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	看護職員が分薬、前日の夕方夜勤と日勤2名で確認している。薬の目的や副作用について、服薬表にて確認し、状態に変化がある際は、看護職員へ報告、相談。医師の指示を仰ぐようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	散歩、塗り絵、家事手伝い、テレビ観賞、レクリエーション等で全入居者様が役割、楽しみを見出し、気分転換が行えるよう支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	コロナ禍もあり、海岸沿いの散歩、車での花見ドライブを感染対策を行いながら取り組んだ。5類へ移行後も、買い物や外食へ出かけることは未だ行えていない。	コロナ禍もあり、外出等の支援はなかなかできなかった。11月には、入居者17名で2日間で外食を行う事ができた。ドライブや散歩の支援はできている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	コロナ禍もあり、買い物支援は難しい状況であるが、一人ひとりが希望する物があれば、ご本人に確認し職員が買い物を代行し希望に添えるよう努めている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	携帯電話を所持している方が2名おり、電話連絡を行っている。他の入居者様も、施設にある電話やLINEを使用したビデオ通話、葉書を担当職員と一緒に記入し、ご家族様へ送っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	玄関には、季節の花を飾り、リビング壁面には入居者様と一緒に、季節に応じた飾りを作成したものを掲示したり、畑には季節の野菜を作り、季節を感じることができるよう努めている。	居室前が共用空間であり、清潔が保たれている。季節の飾りが壁面に飾られ、それ以外の飾り物は少なく、落ち着いた空間となっている。広い空間であるが、それぞれが好みの場所で団らんでできるようになっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	一人ひとりが楽しく過ごせるよう、レクリエーションを工夫し、気の合う方と会話を楽しむ時間や一人で日なたぼっこが自然に楽しめるよう環境を整えている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室には、自宅で使っていた物を持って来てもらい、自宅で生活している時のような気持ちや安心感が少しでも得られるように努めている。	テレビや衣装ケース等、思い思いの物が持ち込まれている。自分の作品や、孫からの手紙等も飾られ、個人にあわせた空間となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	一人ひとりに応じて、福祉用具の選択をしている。トイレの入り口には、目が見えにくくなった入居者様の為、大きな表示を作るなどして、その時に応じた環境調整を行っている。		